

古川明子

## コテージの暖炉の前で

夕餉のあと マシユマロを焼こうと炎を見ていたとき  
突然思い出したのだ 母を荼毘に付した火葬炉の扉を  
やわらかな頬や手のひらが 忽然とこの世から消えた日  
火は 彼女のからだの痛みもこころの苦しみも持ち去った  
今頃母はどうしているのだろう 決して触れられない世界で